

『無上黄籙大齋立成儀』の正薦と普渡

松本浩一*

The salvation of the ancestors and the Universal salvation in
“Standardized Rituals of the Supreme Yellow Register Retreat”

Koichi MATSUMOTO

抄録

この論文では、宋代に成立した『無上黄籙大齋立成儀』に見える、黄籙齋の施主にとって主たる救済の対象である祖先のための一連の儀礼(ここでは正薦と呼ぶ)それぞれについて、前論で論じた普渡儀礼における対応する個々の儀礼と比較しながら考察し、この儀礼全体の特色と普渡との関係について論じた。ここでははじめに道教の葬送儀礼についての研究動向を概観した後、普渡についての前論では取り上げなかった「破獄」儀礼について述べ、次に「召魂」、「疾病の治療」、「沐浴」、「施食」、「説教」、「鍊度」、「伝符・授戒」の部分について、普渡儀礼における個々の儀礼と比較しながら、神々に奏上する文書や、唱える呪文、符などの内容に注目して構成をたどっていき、最後に全体を通じて比較を総括し、その結果両者の儀礼はその重点の置き方に相違があり、それぞれどの点に重点を置いているかを明らかにした。さらに仏教の普渡儀礼、水陸齋との比較考察を行い、従来言われていたように、道教が仏教の普渡を借用したのではなく、仏教・道教が相互に影響し合って儀礼を整えていったこと、また黄籙齋の変遷の中で、「立成儀」等に見える宋代の形態は、過渡的な形態を示していることなどを指摘した。

Abstract

This paper intends to investigate the series of rites to relieve the chief benefactor's ancestors in "Standardized Rituals of the Supreme Yellow Register Retreat", which has been compiled early in Southern-Song Period, comparing with corresponding rite in the Universal salvation rites, which are investigated in my previous paper. After surveying the earlier studies, 'breaking down the hells' rite, which is not studied in previous paper, is investigated, next about 'summoning the dead souls', 'curing their disease', 'bathing', 'giving meals', 'preaching', 'sublimation', 'giving passports to Heaven', paying attention to documents, which are reported to Heavenly gods, spells and contracts, and comparing with corresponding rite in Universal salvation rites the construction of each rite is investigated. It is clarified that in which parts of rites each kind of rites places great importance, Daoism and Buddhism gradually made their own rites complete mutually effecting each other in this period.

* 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and media Science
University of Tsukuba

はじめに

筆者は以前に、『無上黄籙大齋立成儀』（以下「立成儀」と略称）における普渡の構成についてかなり詳細に紹介し、また仏教の『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經』に描かれた施餓鬼儀礼と比較しながら、道教普渡の特色について論じた。この論文では普渡儀礼と正薦の儀礼、すなわちある特定の物故者の葬儀のために行われる儀礼と比較しながら、それぞれの特色と力点の置き方の違いについて考察し、道教の普渡儀礼と正薦の儀礼との関係についても論及して行くことにしたい。

始めに道教の葬送儀礼研究の現状を紹介し、次に「立成儀」に記述された正薦の儀礼を順序に沿って紹介していく。まず普渡においては取り上げなかった「破獄」儀から、「召魂」、「疾病の治療」、「沐浴」、「施食」、「説教」、「鍊度」、「伝符授戒」の儀礼構成について、用いられる呪文や神々に奏上する文書の内容とともに紹介しながら、普渡との比較考察を行っていく。そして最後に、道教の普渡と正薦の儀礼、さらにその形成に大きな影響を与えた仏教の普渡儀礼との関係について論及することにした。

「立成儀」は、宋から元にかけての時代に生み出された多くの儀礼書の中でも、比較的早い時代に成立したと考えられている。この書の編者である蔣叔興は、伝授者とされる留用光を龍虎山に二度訪ねているが、二回目の時に荆・蜀の方士より授かった法を受けられ、不備な部分を補うように勧められた。蔣叔興は閲覧した秘書を編集し、誤りや異同を訂正して、『黄籙齋儀』36卷等を編纂し、嘉定16（1223）年に成ったが、ラガウェイ氏に依れば現行の「立成儀」は、この『黄籙齋儀』に巻51-57を付け加えたものではないかという¹。黄籙齋は齋と呼ばれる道教の大規模な儀礼の一種で、主として死者の救済のために行われる。北周に成立した『無上秘要』にはそのための儀礼書が収められており、唐末五代の杜光庭は『太上黄籙齋儀』58卷を編纂しており、この儀礼が重視されていたことがわかる。宋代になると、この杜光庭の儀礼に新しく多くの儀礼が付け加わるとともに、また様々な目的で行われるようになっていく。「立成儀」に見える黄籙齋は、宋代におけるそのような変化を反映している。

1. 道教の葬送儀礼研究の概観

前論で論じたように、宋代以降の葬送儀礼は、『朱子家礼』に代表されるような儒教の儀礼と、仏教の僧侶や

道士を招いて読経や懺悔を行い、物故者を地獄から救済する儀礼との組み合わせから構成されているとあってよい。現在中国で行われている道教の葬送儀礼については、戦前からの伝統を残している台湾・香港の儀礼が調査・研究されてきた。台湾南部の道士が行う葬送儀礼については、まず大淵忍爾氏の記念碑的な著作は、台南市の陳栄盛道長の行う儀礼につき、用いる儀礼書全文および文書そしてその解説を載せているが、その中で葬送儀礼（拔度儀礼）である「功德」儀礼について紹介している²。またラガウェイ氏は、功德の基本的な過程と「開通冥路」、「放赦馬」、「打城」を紹介し解説している³。また浅野春二氏は、やはり台南市の陳栄盛道長の儀礼についての考察を進め、「功德」を含む儀礼の内容ばかりでなく、儀礼を行う道士団の結成のメカニズムや人間関係、また『家礼大成』に示された儒教の祭祖儀礼との関係などにも触れている⁴。丸山宏氏は、高雄県の杜永昌道長を対象に、主として儀礼の中で用いられる諸種の文書に焦点を当てた研究を行っているが、「功德」の儀礼の構成についても論じており、金允中『上清靈宝大法』など宋代の儀礼書との関連についても触れている⁵。台湾の研究者では、李豊楙氏も道教の葬送儀礼と目連戯についての論文を発表しているが、謝聰輝氏との共著においては、「功德」儀礼を概観している⁶。最近のものでは洪瑩發氏・林長正氏の著書⁷、山田明広氏・洪瑩發氏の放赦儀礼に関する論等がある⁸。

また中国の道教における死者のための儀礼については、彭理福氏や⁹任宗権氏¹⁰が全真教系統の儀礼について紹介しており、胡天成氏主編の著書では、重慶の道教の葬送儀礼について、用いる符や文書の内容を含め、儀礼全体を詳細に記述している¹¹。

現在見られる様々な道教の葬送儀礼の成立過程を考察し、その時代の儀礼が各時代において果たした役割を明らかにするために、歴史的な研究は重要な意味を持っている。まず道教儀礼の成立期である魏晋南北朝時代については、まずマスペロ氏は六朝時代の死者救済の儀礼である黄籙齋について、その儀礼の過程と目的などを論じ¹²、山田利明、小林正美の両氏も六朝時代の靈宝齋について論じているが、特に黄籙齋を取り上げて論じているわけではない¹³。呂鵬志氏は、六朝初期の靈宝齋についてかなり詳細に論じており、その中には拔度儀礼に関するものも含まれている¹⁴。

唐末の杜光庭が集大成した儀礼に、新たな儀礼が加えられた宋代の黄籙齋については、松本が「立成儀」に見える黄籙齋の構成や用いられる文書などについて論じているが、すべての過程を覆ってはいない¹⁵。浅野春二

氏は特に神虎法に焦点を当てた召魂儀礼について一連の論考を發表している¹⁶。しかし宋代の儀礼書に焦点を当てた本格的な研究はこれからといってよい。

2. 「破獄」

普渡と正薦の儀礼に先立って、破獄という地獄から亡魂を解放する儀礼が行われる。この儀礼に関しては、先論で論じたので詳しくは言及しないが、普渡と正薦の儀礼の関係を示す部分もあるので、ここで簡単に触れておきたい¹⁷。

「立成儀」巻1「建齋総式」によれば、破獄の儀礼は正齋の第一日の夜に行われることになっており、第二日の夜に普渡のための諸儀礼がおこなわれる。黄録齋の主要な救済の対象となる亡魂（即ち正薦の亡魂）については、すでに宿啓の後すなわち正齋前一日の夜に、召霊から施食までの儀礼がおこなわれることになっているから、破獄の主たる目的は普渡の対象となる孤魂一般ということになる。正齋第一日の夜には「静夜には、法師は九獄神燈の前に至り、玉清破地獄真符の告文を宣し、定式によって燈に懺悔し、九清梵唱破獄呪を唱え、策杖を持って符を発し破獄を行う。九幽神燈に礼し、廻耀輪燈に懺悔する」(11a-b)¹⁸とある。すなわち始めに「九獄神燈儀」を行い、続いて「九幽神燈儀」、「廻耀輪燈儀」を行うという順序になる。

「立成儀」巻24には、「九幽神燈儀」がまず記載され、続いて「九獄神燈儀」そして「五苦迴耀輪燈儀」が載せられている。「九幽神燈儀」は、前論で記したように、神燈の光明が上は天堂、中は神州、下は九幽獄、それぞれの九つの方向に対応する部分を普く照らし、その光明によって地獄の暗幽を照破し、それに乗じて亡魂を地獄の苦しみから解放するという趣旨のもので、杜光庭の『太上黄録齋儀』にも見えているから、由来はかなり古いと考えられる。その最初の上奏文に「今謹んで黄録大齋主某は、伏して某霊を救済するための功德とするために、黄録大齋を建て、順序に従い規定に準拠して然燈する」(1b)とあるが、これによれば破獄は、地獄から救済の主要対象である亡魂を召請するというより、この儀礼を行うことで、「某霊を救済するための功德とする(資薦某霊)」ことに、その目的があるように見える。続いて中央から九つの各方角を燈により照らしていくが、その際に読み上げる文章にも、「・・・今奉じて黄録大齋主某のために、某霊を薦拔することに資する。謹んで九幽神燈を然し、・・・下は中央普掠の獄を照らし、諸の幽暗を破り、諸の光明を開く。劍の樹はその切先を隠

し、刀の山は刃を断つ。無辺の罪魂、一切の窮魂は、苦を止め酸さを停め、愆ちを除き罪を減じ、俱に光明の界に入り、永く黑暗の郷を離れる」(1b-2a)とある。すなわちこの破獄は、各方角の地獄からすべての亡魂を解放するのであるが、その功德を救済の対象となる亡魂に回向するという考えに基づいていることがわかる。

このことは続く「九獄神燈儀」でも同様である。この儀礼では、高功道士が手に策杖を執り、自ら救苦天尊に化して、元始の宝光が地獄を破ると観じて、東方から始めて九幽地獄からそれぞれ罪魂を解放していく。この東方で念じる文章は次のようになっている。「九幽獄の東は風雷獄という。・・・今謹んで黄録大齋主某人が、亡霊某の救済に資するために。霊宝の科格に按じて、九獄神燈を点じて懺悔する。伏して願わくは東方大慈救苦玉靈皇上天尊、普く祥光を放ち、幽獄を照破することを。・・・」(10a-b)とあり、やはり下線部に見られるように、地獄から多くの亡魂を解放することで、救済の対象となる亡魂の功德とするという考えが見られる。

3. 「召魂」

3.1 正薦の召魂

巻26の「召霊儀」では、香や花を供え卓(香花案)を鬼門上に設け、召魂幡をその前に置く。齋官は上香し、道衆は序立して「普猷頌」を唱える。高功は上香して、齋主のために三日にわたる齋を行う事を告げ、亡魂を招いて壇に赴かせ、齋の功果をもって新しい生命を得るよいうにという齋意を述べる(1b)。

次に道士は、太乙救苦天尊に変身したと存思し、神虎罡を踏んで、神吏を招く。そして北魁玄範府神虎提魂撰魄倒生玄司玉女等、雄左玉曹玄伯、雌右武鸞主吏、上部追魂使者、中部追魂使者、下部追魂使者、霄輔助精大神、七道功曹および社令・城隍・五道・土地等の神々に速やかに壇に來臨してくれることを願う。さらに齋意を述べて、今ここで「混元玉札」を発する事を述べ¹⁹、神虎二大聖、三部追魂使者等に、救済の対象となる亡魂を、壇に呼び出すように願う(2a-b)。

「召魂大將軍符」を焼き、高功は霊宝符命によって、亡くなった誰その魂を救済することを宣言し、遅滞なく魂を壇へ導くように召魂大將軍に告げる。そして純陽の小童に幡を執らせ、道士は「神虎二大聖符」を焼き、高功は手印を結びながら次のように黙念する。「雄左玉曹玄伯、雌右武鸞主吏よ、私は今誰その亡魂を撰召し、速やかに霊幡に赴かせます。遅れ滞ることのないように。何昌・喬荀が私の身の神々を輔け、私が下す命令を急いで行わせるように」(2b-3b)。召請の時には、高

功は太一（救苦）天尊に変身し、手印を結び、鬼門の炁を取って旛に吹き付ける。そして次のように唱える「心を尽くして三元直事・神虎將軍・撰魄官君・追魂使者を召します。伏して願わくは、時に応じて下降し、速やかに斎壇に到り、亡魂を引領して、はっきりと報ずるよう」に。「心を尽くして誰その亡魂を召請します。ただ願わくは魂が蒙昧でなく、生存しているように厳かで、今夜今時にこの法会に來臨して、この黄籙齋の開度の功德を受けるように」(3b-4a)。

次に唱える「歌斗章」は、現在台湾南部の烏頭道士が行う功德における召魂儀礼でも、同じものが用いられている。大淵氏によれば、これは「南北斗が鍊度して元の人間の形に歸す呪言である」という²⁰。次に撰魂訣を結びながら、「興生 獨隸 可韓 功都 聚魂 対魂攝」と密呪する。そして次のように唱える。「魂神は澄正に、万炁は長く存し、苦悩を経ずに、身に光明が有り、また本形を聚（あつ）め、また本神を全うせんことを。急急如長生大帝律令」。「胎光、幽精、爽靈の三魂よ、空に歸し真に歸せ。天地の正真の炁が、再び汝の形神を聚める。これは五行造化の真であり、蔵すること無く避けること無く形より逃れることもない。ひとたび呼べば速やかに至り真霊に変ずるよう。急急如律令」。このようにして、三度にわたって亡魂を招いていく。三回目には最後に「迴黄章」と呼ばれる呪文を唱える(4a-5a)。

3.2 普渡における召魂との比較

前論で述べた普渡の召魂においては、はじめに高功が、九鳳破穢真官が來臨するのを存思し、「九鳳破穢罡」を踏み、九華真人に変神する。そして元始天尊が來臨するのを存思し、地獄から壇への道路を開通してくれるように願う段階がある。次に「開通道路符」を發し、二つの呪文を唱える。さらに関連の神々を召請し、「太一飛符」を發して「祝文」を唱えるなど、亡魂を壇へ導くために、そのための通路を確保する手続きを行う。そして「普召牒」を読み上げ、「召魂大將軍符」を發し、亡魂を壇に導く將吏たちを召請して、旛を執って亡魂を招き「迴黄章」を唱える、というものであった。

普渡も正薦も同様の過程を経て進められていくといえる。儀礼書で扱っている量を比較しても、正薦が5葉16行、普渡が5葉とほとんど変わりはない。しかし正薦の場合は召請が三度繰り返され、ここの手続きは丁寧になっている²¹。ただ「開通道路符」や「太一飛符」などは用いられない。普渡では、大勢の孤魂を召請するために、道路を確保することに重点が置かれているのであろう。

4. 「疾病の治療」

4.1 正薦における疾病の治療

高功は次に治病功曹符、召五神混合符を焼き、青帝護魂君、白帝侍魄君や、天医大聖六職治官、尚葉仙靈二官神吏等の医薬関係の神々に壇に降臨し、受度の亡魂に真炁を下し、病気を治療し、魂魄に生を甦らせ、形神を整えさせるように祈願する。そして「もし三毒を除かないなら、なお六情を蔽い、人と我・冤と親を妄りに分別する。そうならば平等というこの所にあることはできない。男子は左、女子は右に並び、各々相携え率いて道に随って来て、入浴・更衣し、壇に向かって法を聴くように」という内容の文を唱える。「大梵隱語（靈書中篇）」を唱えて亡魂を沐浴所に導き、一人が柳の枝で浄水を撒き、穢れをはらう(6b-8a)。

4.2 普渡における疾病の治療との比較

この疾病の治療の部分は、普渡の対応する儀礼に比べ、極めて簡単である。普渡では6葉のスペースをもって記述されていたが、正薦では1葉7行の記述しかない。普渡では1) 解放された亡魂が、再び元の肉体・精神を回復するように、という意をもつ三つの呪文を唱え、天医たちを招請する。2) 「五帝真諱呪」を唱えて、五嶽の炁を亡魂に吹き、「治病功曹符」を發し、「度魂真諱呪」を唱えて三塗の炁を吹く。3) 「大洞十八玉符」を發して、腦・左目・右目・舌・心・肝・脾・肺・腎・陰・胞・胎・結・節・血・精・炁・神・命の十八の神々を召請し、亡魂に新たな器官を生じて神・性が回復するように願う。4) 「召五神混合符」を發して生炁が亡魂に流入するように宣する。5) 六丁金童・玉女や身体の神々に身体の各所を守護するように、また三魂・七魄神に魂魄を守護するように要請する。6) 「玉清生魂育魄保神内呪」を唱えて、亡魂の魂魄が本性を回復し、壇下に集合すると存思する。7) 最後に「身体を失ったのに飢渴の念を忘れることができないので、魂魄や性神を復活させ、身体も完全になり、病も癒えた。罪簿からも除かれ、悪根も滅したので、昇仙を待つように」と宣言する。という順序で行われていた。

上記の青帝護魂君、白帝侍魄君等に真炁を降し、天医たちに病を治療することを祈ること、および治病功曹符を用いることは共通しているが、「大洞十八玉符」によって、身体を新たに形成し、神・性を回復させる部分や、三魂神と七魄神を召請して、三魂・七魄を守護させる部分なども見られない。普渡で招く亡魂の場合、事故や戦乱で命を落とした者も多くあり、骨を野にさらしている者もあるが、中国の民間信仰では死体でも五体満足

でないと思われたいから、特にこの儀礼を重視したのかもしれない。

5. 「沐浴」

5.1 正薦における沐浴

次に呼び出された亡魂を沐浴させる。巻26「沐浴亡霊儀」によれば、まず浴室は清潔にして、香水を並べる。浴室二か所には必要な浴具も備え、きれいな木桶に浄水を蓄えておく(8a)。

まず道士は次の文を唱え、亡魂が鍊度を受けるには、まず身体を清める必要があることを述べる。「私が聞いておりますのに、亡魂が鍊を受けて開明された存在となるのには、必ず真の筈(かご)を仮り、穢炁が盛んで多いのが洗い清められるには、法水を必要とする。それによって亡魂を済度し、真人となることを期します」。そこで「謹んで科式に遵い、靈魂を召集する儀を行い、さきに身体と精神を洗い清めて、その後に壇陛に参朝し、罪の汚れを懺悔して雪ぎ、新たな生に向けて登ることを証明されるようにいたします。願わくは慈悲を賜い、伏して開度を垂れ、真炁を降流させて、昭かに天光をたまひ、普く度を受ける多くの魂が、ともに重玄の叡沢に沐するように」(8a-b)。すなわちここでは身体だけではなく、罪過を洗い流し、心身共に生まれ変わることが祈願されているが、「普く度を受ける多くの魂が」と述べて、決して正薦の亡魂ばかりが対象ではないことが明確にされている。そして「隠語」を唱えながら、水を月建の方角より32回かき回し、「高大なる道徳尊は、功行がすでに円満であり、自ら来臨して(亡魂)を接引し、師とともに相携えて、慈悲の心より法水を恵み、それで愚迷なる者を洗う。これによって永く三塗の岸を渡り、長く五濁の泥を辞する」という呪文(『道門通教必用集』巻5では「清水度魂呪」と名付けられている)を唱えて、亡魂の一切の罪根を洗い流すという意を宣する(8b-9a)。

次に浴室に行って、法水を男女の浴室に入れ、五香を煎じた水と混ぜる。そして「三塗の熱悩が、法沢によって清涼になり、五累(五苦)の牽纏(しがらみ)は、靈津によって澡雪(洗い流す)される。それで天尊が哀愍(あわれむ)し、大道は慈仁なので、衆生を澆漉(救い取る)し、諸苦を済度する。(香によって)薫修した妙典を啓いて、灌鍊の明科を行う。(亡魂を)華池に沐浴させ、道岸に逍遙できるようにする。しかる後に形神(身体と精神)をともに妙なる状態にさせ、福慶が自ずから生じる。亡霊を奉請して、(彼らが)虔誠に浴に就くように」という文章を宣する。次に「東井頌」を唱え

るが、これは普渡でも唱えている。この頌は、『洞玄靈宝二十四生図経』に現れるが(4a-b)、『無上秘要』巻66の「沐浴品」にも引かれている(巻66・4a-b)。そして五色の雲が部屋を満たし、三十二天・日月五星の炁が水の中に混ざると存思する(巻26・9a-b)。

5.2 沐浴の呪文と宣告文についての正薦と普渡の比較

次に「三元品誠沐浴蕩穢呪」、「九真沐浴鍊真呪」、「沐浴丹陽鍊度大呪」、「三元品誠冠帯呪」を順に唱えていくが、それぞれの呪文を唱える前には、文章を読み上げ「謹んで亡霊のために三元品誠沐浴蕩穢呪を唱える」と告げる(10a-11b)。このことは普渡の場合と同様である。普渡の場合に唱える呪文と、「三元品誠沐浴蕩穢呪」と「三元品戒冠帯呪」の二つは共通しているが、「金房度命呪」、「緑字週年内真呪」、「澡鍊超昇呪」はここでは見えない。しかし共通の呪文でも読み上げる文章は異なっている。

たとえば普渡で「三元品戒沐浴蕩穢呪」を唱えるときには、「前世では真実を見失い、遂に苦海に漂流したが、今日救済を受け、華池に沐浴することができた。もし好い因縁に依ることができなければ、浄境に超え出ることにはできない」という文章を読み上げるが、正薦では、「長夜に光明が得られるのは、靈符によって苦から救済されるからであるが、善功が充満するのは、香水によって精を鍊するのに資するようなものである。願わくはこの五蘊から成り立つ身体が、奥深い教えや戒を奉ずることができるように」というものになっている(10a)。

また「三元品誠冠帯呪」の場合は、普渡の場合には「悪を除き善を高揚して、備に蠲潔にいたり、真に登り苦を離れるには、必ず莊嚴であることを要する。今身体が具わり、玉女は靈をもたらした。空には洞室の章を歌い、みな同じく美しい服を着ける」という文章であったが、ここでは「九清の玉座は、上帝の恩光をおよぼし、三洞の金書は、慈尊の法語を演説する。これらは塵界凡俗の者の望むべきものではなく、穢濁の者の聞き得るものではない。すでに身体が清潔になったからは、必ず服飾も莊嚴でなければならない」というものになっている(11b)。正薦・普渡とも同様の趣旨であるといえるが、ただ二つの呪文を通じて、正薦の文章は、(亡魂は)功德を積み、深い教えに触れて救済されるという考え方が明確に示されているといえる。

上記の二つの呪は『太上大道三元品誠謝罪上法』に、沐浴に際して唱える呪と、冠帯を着け衣服を着るときに唱える呪として挙げられている(1a-b)。そして同じく『無上秘要』巻66「沐浴品」にも引用されているが、そ

ここでは前者の呪は、「禍消九冥」の次に、「悪根断絶、福慶自生、今日大願、一切告盟」という部分が加わっているほか、ほぼ一致している(巻66・1b-2a)。また後者の呪文は、巻27「上清南宮水火冶炼鍊度命儀」において、水鍊を行うときにも宣せられる。

一方「九真沐浴鍊真呪」、「沐浴丹陽鍊度大呪」については、前論でふれたように、その内容からいっても、修行の一部としての沐浴の時に唱えられた呪ではなく、亡霊の沐浴・鍊度のために用意されたものだったと考えられる²²。呪文を唱えるに際して、読み上げられる文章は、それぞれ「形を洗って質を鍊し、名を仙人の名簿の中に書す；命を救済して生に返り、字を玉清の上に列す。魂神を澄正にしようと欲するなら、まさに罪垢を消除させるべきである」。「東極の尊(太乙救苦天尊)に申しあげ、普く生を超えて死から済う；丹華の水を流し、悉く穢を除き陰を洗う。請い願わくは永く正真を奉じ、よく常に清浄を行う」。というもので、穢れを除き罪を洗い流すという趣旨が表現されている。この点は普渡の部分と変わらない。扱われているスペースも、正薦が4葉、普渡が3葉6行と大きな違いはない。

6. 「施食」

6.1 正薦における施食

次に「立成儀」巻26では、亡魂に食を給する儀式である「呪食儀」が続く。始めに霊位の前に飲食・浄水・香花を用意する。香をささげて、「死者誰その亡魂は、行く水に従いあつという間に月日を経たが、今まさに開き通じる時に逢おうとしています。謹んで清香の供え物を備え、敬して浄らかな人によって、奥深い科儀に従い、宝偈を宣して加持し、靈章を演説して文書を受けようとしています。伏してお願いいたします。魂神が不味で生きているように厳かとなり、この齋功によって妙道を成就できますように」という意味の文章を宣する(12a-b)。

6.2 施食の呪文と宣告文についての正薦と普渡の比較

正薦の「呪食」で始めに唱える文章は、「齋功によって妙道を成就できますように」ということが基調となっている。これは沐浴で見たところと同様である。これが終わるとすぐに一連の呪文を唱える部分に入る。先に見たように、普渡では始めに「普献頌」が唱えられて、「上啓」の文章が読み上げられる。そして三帰依が行われ、「救苦経」・「靈書中篇」が読み上げられ、さらに「甘露通真呪」、「破酆都地獄開業道呪」が唱えられ、説教が行われるなど一連の儀礼がなされた後、「靈宝普度大齋施

斛宣演法語儀」に基づいて、実際の施食がなされていた。

そこで唱えられる一連の呪文を、正薦の儀礼でのものと比較してみると次のようになる。

普渡	正薦
1. 甘露通真呪	3. 玉清慧命啓請呪
2. 破酆都地獄開業道呪	2. 淨酆都破地獄呪
3. 玉清慧命啓請法言	8. 玉清雲官梵唱生魂育魄呪
4. 玉清甘露加持法食呪	1. 甘露通真法食呪
5. 三光法炁呪	4. 玉清甘露法食呪
6. 三光流精呪	5. 三光法炁法食呪
7. 三光沢嬰呪	6. 三光流精法食呪
8. 玉清陰生梵唱呪	7. 三光沢嬰法食呪
9. 破地獄離苦升天呪	三光陽玉法食呪
	九幽往生呪
	9. 離苦升天呪

1 「甘露通真呪」

普渡では、「変食符」を水盆中に沈め入れてから、「甘露通真呪」を三回唱える。高功は水盂を捧げ持ち柏の枝を以て旋繞し、普く斛食に撒く。青玄上帝・同兆真人・及び官君らがみな甘露真言を誦し、その甘露を撒き、香炁が馥郁として、普く満ち足りると存思する。正薦では、この呪文は四番目に唱えられ「甘露通真法食呪」と名付けられている。「この者には魂魄がすでに生じ、必ず天への路を超えていく。形質を鍊度し、精神を洗い清める。来たつて法筵に赴き、この供養を受ける。なお喉がまだ通じず、様々な障礙があるのを考慮する」として、呪文を唱え、「天尊は言う、もし亡人が久しく地獄に拘束され、まだ超生を遂げていないなら、この呪文を聴いて、すぐに喉が開通し障礙がなくなることを得る。自然に快樂し、甘香を飲食する。回向心を生じ、煩惱の業を絶つ」と続ける(14a-b)。正薦では、喉を通じさせることが強調されているが、この呪文は特にこの意味もっているわけではない。しかし教えを受けて障礙を断つという点は、呪文の内容を反映しているといえる。

2 「破酆都地獄開業道呪」

普渡では、道士たちは旋繞し、高功は位にあって神を凝らし、「東北方の酆都九幽地獄等にいる罪魂が、種種の苦刑を受けているが、泥丸中の玉清上帝が宝座にあり、真人・官吏とともに一緒に『破酆都地獄開業道呪』を唱える。上帝は九色の慶雲紫炁を吐き出し、金光によって地獄の鉄城を破り、枷鎖を打ち砕く、地獄を改変して清浄境とする、罪魂は出て来ることができて壇下に到る」。このような存思を行うとともに、この呪文を三回唱える。正薦では、「切に聞かぬ酆都は幽遠であり、地獄は暗い。亡魂は救済されることを欲しているが、宝偈は讚詠より先んずるべきである」と唱えて、この呪文(こ

ここでは「酆都破地獄呪」と名付けられる)を唱え、「九幽抜罪天尊」の名号を唱える(13a-b)。存思の内容からも、この呪文は普渡においてより重視されていることがうかがえる。このことは破獄の儀礼で述べたこととも一致する。

3 「玉清慧命啓請法言」

正薦では、「玉清慧命啓請呪」となっている。この呪文を唱えて、「太一救苦天尊」号を唱え、道士たちは三回唱和する(12b-13a)。しかし呪文を唱える前後に、宣すべき文章は示されておらず、普渡の場合と比較できないので、普渡で宣する文章を再び示すことはしない。

4 「玉清甘露加持法食呪」

普渡では、「雲厨の妙膳を食べることができ、紫府の靈文を聞くことができ、あなた方は道を得て神仙に成ることができる。すでに人の身体を獲得し、現在は法食を心行くまで食べるように。あなた方が仙界に往生するように」と宣した後、唱えることになっている。正薦では、五番目に唱えられ「玉清甘露法食呪」とされている。「元始天尊は世界を開き、真経によって教えを演説し、その恩は明快で、普く度することは無窮である。衆生を広く潤うことができるがゆえに甘露と名付け、業障を破除できるがゆえに法言という。今この法食に詣でてこれを享受することができる。慈光と甘露に潤うことができ、身体の孔は聡明となり、神識が明らかとなる。五苦を離れて九清に昇り、真筌によって救済される」と述べた後、呪文を続けて唱える。唱える文章からすれば、普渡のほうが内容は道教的であるが、正薦のほうが普渡の意味を強く表現している(15a-b)。

5 「三光法炁呪」

正薦では「三光法炁法食呪」となっており、呪文を唱えるときには特に宣言する文章はない。以下の二つの呪文も同様である(15b)。

6 「三光流精呪」

正薦では「三光流精法食呪」となっている(16a)。

7 「三光沢嬰呪」

正薦では「三光沢嬰法食呪」となっている(16a-b)。

続いて正薦で唱えられる二つの呪文は、普渡では唱えられない。まず「三光陽玉法食呪」は「陽玉は正真の炁であり、妙真より三景(日・月・星)が分れる。玄和は靈音を唱え、八会は瓊文を敷く。五老は丹宅に宴し、飄飄として景雲に乗る。大聖と諸天衆は、龍に駕して玉津を飲む。三五は生籍を定め、太上の賓として遊び戯れる。華光は朗々として際なく、手を携えて帝宸に朝する」という内容を持っている(16b)。次に「九幽往生呪」を唱える。これは「寒庭は悲苦が多く、回心して元皇に

礼する。女青靈宝の符、中山真帝の書を、一たび念ずれば太清に昇り、黙誦すれば太無を観る。功は九幽の下に帰し、旋旋として紫盧が生ずる」を唱え、「随願往生天尊」の名号を唱える(16b-17a)。

8 「玉清陰生梵唱呪」

普渡では、「元始天尊は世界を創造し、真文が出現した、救苦天尊は亡魂を導くために、神妙なる科儀を流通させた、あなた方は久しく苦悩の境遇に墮落しており、正しい道を聴くことがなかった、甘露と法言とによって業障を破り除き、本来の本性を回復すべきである」と宣告して唱える。正薦では、この呪文は三番目に置かれ「玉清雲宮梵唱生魂育魄呪」と呼ばれている。「すでに地獄の門が開き、酆都は収まり、次に生まれ変わるべきところに随って、幽界を出て離れる」と宣して唱えることになっている(13b-14a)。

9 「破地獄離苦升天神呪」

普渡では、「法食を享受した亡魂は、罪業が消えて寿命は無尽となり、輪廻を脱した。施しをする者も受ける者も、同じように道恩を受け、福果を得られる」と宣して、この呪文を唱えたが、正薦ではこの呪文は「離苦升天呪」と呼ばれており、これを唱えた後、「弘濟無辺天尊」の名号を唱える。そして最後に「伏して願わくは、名を丹台に記し、罪は黒籍から消え、永く三途の対を罷め、直ちに九老の郷に登ることができるように」と唱えて終わる(17a)。

この施食の部分は、圧倒的に普渡のほうがスペースを取っている。普渡では16葉5行であったのが、正薦では5葉16行しかない。また呪文を唱えるに際して宣告する文章も、普渡のほうが明瞭にその意図を示すものが提示されている。

7. 「説教」

7.1 正薦における説教

正薦の亡魂への説教は、授戒に先立って行われる。巻28「靈宝大齋伝授戒符昇度亡靈儀」に記されている。道士たちは旛によって亡魂を引率し、説戒所に至り、そこで高功は上香して神々に功德の証盟を願い、智慧頌の第三句を唱えて、説教に移る。

妙戒と靈宝の玉符を授けるに当たり、亡魂が真の道に迷い輪廻を受けていることを考慮し、この法を説いて冥途を離れさせる(2a)。

経によれば三界の衆生にはもともと流転というものは無く、純一の道炁もはじめは生滅ということはなかった。しかし身体を生を受け知覚を得て以来、あらゆる感覚に囚われるようになり、輪廻の中で一切の苦を受

け、未だ解脱していない。大道を知らず、性命の生滅が何によって起こるかを覚らず、たとえ天人となっても、道の本を知らないの、また墮落してしまう(2a-b)。

そこで天尊は最上の法を流出し、大いなる教えを興し、普く天・人を救済しようとした。この後元始天尊の法身から空が形成され、そこから生命が自生した。生には本体は無いが、形を成し識が宿った。そして妄想から我の思いが生まれ、明と暗から五物・五形が形成され、相互に侵し流転を成した。人々はこのような顛倒を覺知しない(3a-b)。

しかし変転は極まりないが、元神すなわち性命は生死に関わらず存在し続ける。すなわち生は万変するといっても、汝たるゆえんの者は、いまだかつて遷ったことはない。綿綿として存するごとく、古より今に及ぶまで、その道は息まない。故に我が教えの中では、空は頑空なのではなく、内に神化を育成することを知らるようにさせる。生道は絶えず、道の根本である。これをもって養生すれば、生は窮期がなく、これをもって物を処理すれば、物は無尽の相を保つ。知によってはこの道を得ることはできないが、これによって生を養えば生が窮まるときはない(3b-5a)。

受戒の弟子はこの妙義を悟り解すれば、たちまち道の真を識り、輪廻の道を絶つことができる。もしまだこれと契ることがなければ、私はまさに汝のために、三皈依を授け、九真戒を説いて、それを梯子とし、渡しや橋としよう(5a)。

7.2 説教についての正薦と普渡の比較

ここで述べられている教えを、普渡の際の説教と比較してみると、内容はそれほど大きな違いはないが、やはりいくつかの相違点に気付く。まず「物に執着することによって、輪廻の中にあつて生死を続け、そこから脱することはない。たとえ天人となっても、道の本を知らないの、また墮落してしまう」、という内容は両者とも変わりがなく、仏教の教義からの影響が見られる。しかしここで明確にされている、「元神は存在し続け、汝たるゆえんの者は変化しない。空は頑空なのではなく、内に神化を育成することを知らるようにさせる。生道は絶えず、道の根本である」という内容は、この正薦の説教で明らかにされる。普渡の説教において力点が置かれているのは、「三清は煩惱を離れず、大道は別のところにあるのではなく、身心がすなわち真の道なのだ」というところであるように見える。そして説教の最後に、普渡では「普く施食を設け、あなた方が帰依の心を起こし、

輪廻を解脱する道をたどれるように祈願する」となっていたが、ここでは「この妙義を悟り解すれば、たちまち道の真を識り、輪廻の道を絶つことができる」となっていることは大きな相違点であるといえよう。ここで両者とも「輪廻の道を絶つ」というのが成仙を意味していることは言うまでもないが、普渡の説教では、信仰による救済の道であり、正薦の説教では、道教的教義を解悟することによって、それを達成することが述べられている。

しかし一番大きな相違点は、二つの説教の置かれた位置である。普渡の場合は施食が終わった後、鍊度の前に置かれている。そして説教の最後は、「今道教の儀軌によって、六道に沈淪する亡魂のために、普く施食を設け、あなた方が帰依の心を起こし、輪廻を解脱する道をたどれるように祈願する。特にあなた方の三業が解き除かれることがないのを考慮して、続いて鍊度・授戒を行う」となっていた。しかし正薦では、鍊度の後に置かれており、最後に「もしまだこれが受け入れられない状況ならば、三皈依を授け、九真戒を説いて、それを梯子としよう」としている。すなわち普渡の場合は、「施食によって帰依の心を起こし、(それによって)輪廻を解脱する道をたどる」というのであり、これは「仏道に帰依して、解脱の道を歩む」という仏教の考え方そのままであるといえる。それに対し正薦では、鍊度が終わり(新たな仙人の身体を得て)、また道の真理を悟ることによって自ら仙界にふさわしい者になったが、まだそれが不可能な状況ならば、「三皈依、九真戒を授けて、それを補助としよう」というのである。この相違は大きいといえよう。

8. 「鍊度」

鍊度の儀礼の内容は、普渡・正薦ともにその構成にほとんど変わりはない。しかし普渡が15葉4行であるのに、正薦の儀礼は巻27「鍊度亡霊請降水火醮献儀」と、同巻の「上清南宮水火治鍊度命儀」、合わせて21葉9行を要している。

普渡では、北極紫微大帝・南極長生大帝への啓白の後(巻31・1a-2a)、存思を行い、すぐに火池の儀礼に入った。しかし正薦の儀礼では、啓白の後、鍊度堂に設置された聖位へ神々を招請し、三献礼を行う。その三献礼の中でも、特に初献の願文は、正薦の特色をよく示していると考えられる。それは次のように述べている。「伏して聞くに太極は混淪として、宗祖を分けることなく、真文は煥發として、普く神霊を植える。三元(天地人)の

位を定め、万化を総べ司る。人道に生まれることを得て、形質を太陽に濯（あら）ったが、その本真を離れ、自ら死壊を取った。五行は散り落ち、億劫の間飄沉している。大聖の大慈は、普く救済する。その手段となる經典・儀礼は多く、方便は多種であり、洞陽冶鍊（鍊度）の庭を開いて、慾海に流される識を超える。胎を鍊して本に返り、それを証明して昇仙する。今は儀典にそって、鍊度を宣行する。伏して請うらくは光の輝きを迂回させて、昭らかに天光を賜わらることを。三界の真霊、および大法の官將に勅して、形を化し炁を降し、当職の役人に命じて、私を補助させ、符命を頒ち宣し、救済に関係する一切の亡魂は、形質を黄華で洗い清め、鍊度を行い、悪根は断絶して、苦道の輪廻を止め、道炁は充盈して、福堂に浮ぶことができるようになるように」（2b-3a）。ここにはこれらの儀礼（すなわち亡魂の救済のための手続き）と、その背景となる教義が明瞭に示されている。

また前論で述べたように、普渡では「十二炁化生符」がまとめて宣せられた。しかしここでは十二の臓器それぞれに、対応する將軍の呪文を唱えて符を焼き、將軍の至るのを存思して、それを亡魂の中に吹き込む。次に臓器を生ずる符を取って呪文を唱え、対応する方角の炁を符に吹き込んで、これを焼いた後、それを亡魂に吹き込む。これを十二の臓器ごとに、十二回行っていく（10a-13b）。

9. 「伝符授戒」

正薦の伝符授戒の儀礼は、巻28「靈寶大齋伝授戒符昇度亡霊儀」に述べられているが、普渡に比べて特に亡魂のために発行する文書や手続きなどの点で、かなり詳細になっているといえる。

先に「齋家に霊を別にさせる」とある。これは特に正薦の亡魂を対象とする手続きが行われるからなのであろうか。次に道士は亡魂を呼び起こし、旛によって説戒所に導く。普渡の場合は、祝文を唱えて後に「靈書中篇によって衆魂を引いて説戒所に至る」とある（1a）。

9.1 請神と功德の証盟の依頼

そこで法師は、座に就き、上香して「道德の香は三境の路に満ちる。天尊は慈悲をもって、秘密の言葉を語る。諸の亡霊を救済し、法橋が早くわたされる。願わくは九幽（地獄）の魂が、同じく三塗の苦を離れるように」という呪文を唱え、「齋主の億曾万祖、受度亡霊」が、あらゆる神々に帰依することを述べ、「願わくは慈悲を

賜い、この場に降臨して、功德を証盟し、戒・符を伝授してくれるように。九夜に沈む魂が、三乗の成果を得ますように」と宣する（1a-b）。一方で普渡の場合は、「六道衆生、孤魂滞魄、一切衆霊」が神々に稽首し、神々が「道場に降臨して、受戒を証明してくれるように」願われている。そして法師は座について、さきに述べた説教を行う。

9.2 三帰依

次に三帰依を行う。ここの部分は普渡には見られない。始めに道宝に対する帰依を行う。まず道を讃え、次にそれに帰依することを宣言し、そのことによって亡魂が神仙界に行けるように願う。「亡霊に宣告する、第一に無上道宝に帰依する、十方の上聖・太上三尊は、億劫にわたって人を救済し、天に先んじて教えを講演した。慈悲によって広く救い、普く群生を済う。玉の相・金の容姿は、形を分け変化する。影のように随い響のように答え、善く応ずること無窮である。この世にあっても他生にあっても、常にまさに信じ礼すべきである」と唱え、「道宝頌」を唱える。これは「稽首して道に帰依する、大羅元始（天）尊。願わくはこの道の力をもって、この亡魂を開度することを」というもので、これに道士たちは「神仙界に往生することを」と和する（5a-b）。同様にして、経宝、師宝に対して帰依を宣言し、「経宝頌」、「師宝頌」を唱えていく（6a-b）。

9.3 九戒の伝授

次に「亡霊の衆は、無上正真三宝に帰依し終わった。ここでまさに九真妙戒を宣説すべきである。妙戒は衆苦を消し積き、九天に遷昇させる。まさに一心に、諦聴し諦受すべきである」と唱え、戒を授ける（6b-7a）。九戒は先に示した普渡の際の九戒と全く一致しているが、以下の授戒後の宣告文は普渡の際のものと異なっている。

上のような妙戒は、みな元始天尊が、みづから演説したもので、普く一切のために、諸の悪根を滅するためのものである。今玄科に依り、聖に対して伝授する。この九真の力に仗って、永く五苦の災いを辞し、朱宮に上昇して、超えて紫府に登るように。伏して願わくは侍経玉女、護戒靈童、飛天神王、巨天力士は、遍く十方無極世界、九幽地獄の中に下り、二十四曹、三十六府は、まさに亡過（某）のために名を黒簿から削り、罪を陰関に滅するように。長夜の泉局（地獄の門）を開いて、無為の道路（仙界への道路）を指す。九霄宮の内を、常に遊宴の方と為し；八極の天の中を、逍遙の界と作す。あらゆる金籙白簡、玉券宝符

は、恭んで道前に対し、次第に宣告する(7a-b)。

ここに述べられていることは、救済の行政的な手続きに関することであるが、普渡に比べてこの部分が増えており、従って発する文書も増えている。このことは正薦の特徴として指摘できる。

9.4 諸文書の伝授

9.4.1 長生符

続いて昇仙に必要な諸文書が発行される。始めに「長生符」の告文を宣するが、それに先立ち高功は次のように存思する。「天門が豁(ひろ)く開いて、祥光の瑞彩が眩く耀く。心に玉京金闕に三宝上帝が、宝座に御し、侍衛は巖然としているのを目にする。上帝は金童玉女に勅命して、符簡を捧げ、金光に乗じて、天門より降らせる」。(高功は)簡を執り齒を叩くこと三通、法に従って散形呪を念じ、炁を取り符に吹きつける。その後には告文を宣し、簡を封ずる²³(7b)。そして度簡頌を唱える。これは「立成儀」巻36に載っているが、内容は「天地開闢の時に、元始天尊によってもたらされた經典により、九幽にある祖先を救済し、道とともにあるようにする。黄籙の簡により、苦根が除かれる」というものである(5a)。

9.4.2 九天宝誥、長生度命金籙

次に「九天宝誥」、「長生度命金籙」を宣する。前者については、巻45に告文があり、そこには宝誥の三十二字は「符命門に見える」とあるが、「符命門」には見いだせない(8b-9b)。後者は「太上洞玄靈寶長生度命無上黄籙」といい、巻41に実物が載せられている。それによれば始めに、次のような文章がある。

惟うに太歳(某甲子某)年(某)月(某)朔(某)日(某)辰郷貫(某人)、伏して亡親(某)人にために(同青詞語至上謝天恩)仍お黄籙齋壇に就いて、太上洞玄靈寶長生度命一階を伝授し、(某乙)の靈魂に付し(靈魂は)賚(たま)わって(それを)執るようお願いします。そして三界を過度し、九天に超升するように。謹んで按ずるに経は云う、元始天尊は昔九清妙境・三元宮中に在り、諸天聖衆とともに、至妙を敷き弘め、人天を開化し、善功を標し記し、名を黄籙に注し、金格・玉簡は、三清に陳列された。一一の地獄は、皆な十方救苦天尊が、九幽に入り、諸苦を抜度するのを見た。天尊は四衆に普く告げた、「汝等は若し能く金籙白簡・九真妙戒・長生靈符・救苦真符を受持することができれば、まさに九幽の大罪を消し、名を九宮に標すことができる」。察命童子・護戒威神・五帝直符・六宮掾吏は、自らまさに簡文に随って、受戒

を覆い護るように。弟子は今まさに汝のために九真妙戒・金籙白簡を顕かに説く、受持の功德は、難を救い苦を濟う、神力は思い難い。衆靈は稽首して、伏して教命を聴くように(巻41・10a-b)。

続いて「天尊告曰」としてさきに授けられた九戒が載せられ、次に「護戒威神」の画像、そして伝度に関わった神々や師の名前が列挙される。そして「察命童子」の画像、「救苦真符」とその告文、「百二十曹官」の画像、「長生靈符」とその告文、「迴骸起死尊神」、「監生大神」の画像、「帝君品命」の画像が続き、「救済を受ける誰その亡魂は、即日恭んで黄籙齋壇に詣でて、太上洞玄靈寶長生度命無上黄籙一階を拜受する。法の規定のように受持し、永く濟抜に充てる。人間でも天上でも、敬い信じて奉行すること、一に玄科律令のように」という文章の後、「某歳某年某月某朔某日某州縣官觀黄籙齋壇給保舉師具法位姓押 監度師具法位姓押 度師具法位姓押 太上洞玄靈寶長生度命無上黄籙」というように、師の名前が列挙されて終わっている(10b-15b)。この後の「立成儀」の注釈には「この長生度命黄籙は、正度の亡魂だけに用いる」とある(16a)。すなわち黄籙齋という儀礼を行って救済する最も重要な靈魂だけに用いるというのである。

これが宣告された後、高功は「まさに願わくは亡靈は受持の後、地の逮役を断ち、鍊を受けて更生する。永く三塗・五苦・八難を超え、三界を超凌し、上清に逍遙する」と唱え、呪文が終わって、籙を旛に結びつける(巻28・8a)。

9.4.3 昇天券

そして昇天券告文を宣する。この昇天券も告文は巻45にあるが(巻45・5a-6b)、昇天券の実物は載せられていない。これを宣し畢って、高功は券を二つにわけ。定めのように右の半分を旛脚に結び、左の半分を函に封じ、その日に当たる功曹を召して持って行かせる(巻28・8a)。告文は、左券には「誰その亡魂を救済して、道境へ上登させる」、右券には「誰その亡魂はこの功德を受け、道境へ上登する」とあるから、まさに二つに分けた券を、仙界で照合することによって、亡魂の功德と仙界への上登を証明する役割をもっているといえよう(5a-6b)。

9.4.4 保举状

次に保举状を発する。保举とは保証し推挙することを意味するが、ここでは仙界へ上昇する資格があることを保証するということであろう。この時には、十方飛天神王を召し、神王が至りまたこれを持って行くことを存思する。保举状は、「歴闕諸天」、「普告三界」、「勅制

地祇、「元始符命」の四つからなり、やはり巻45に見える。その構成は、「歴闕諸天」を例にとれば、(この状のみ青紙に朱書、後の三状は黄紙に墨書)、始めに「泰玄都省」に宛てて発行することが記され、次に「謹んで道旨を奉じ、某所の某官のために、無上黄籙大齋三晝夜を修建し、誰それ等の亡魂を昇度し、仙界に超え昇るようにする。謹んで靈宝の本科を按じ、まさに保挙を行う者である」。そして「右歴闕諸天、亡魂誰それ等の三悪を滅して、地根を斬って絶ち、五戸を飛度して、名を太玄に列するように請う。魔王は監察推挙して、天門に拘ることがないように。ひとえに告命の如く、風火のように速く駆伝するように」と続く。前半の部分では亡魂の救済の保証が、そして後半の文章では後にも出てくる三塗(三悪)を滅して、五苦(五戸)を越えること、および仙界へ上昇するにあたり、諸天を自由に通過するように述べられている。そして最後に宣告される時と、「三天扶教都天大法天師」の名によって、道士の誰それがこれを宣告する旨が述べられる(巻45・2a-3a)。

この後半の部分は『元始无量度人上品妙經四注(以下「度人經四注」)』の本文をそのまま引用している。すなわち下線の部分の原文は「請滅亡過(某乙)等三悪、斬絶地根、飛度五戸、名列太玄。魔王監舉、無拘天門」であるが、これは「度人經四注」巻2の本文に「請滅三悪、斬絶地根。飛度五戸、名列太玄。魔王監舉、无拘天門」とあるのに全く一致している(巻2・58b-59b)。

次の「普告三界」でも、前半の文章は「歴闕諸天」と同様で、後半の文章は「右普く三界・無極の神郷・曲泉宮・北都羅酆・三官九署・十二河源に告ぐ、亡くなった誰それらの先祖、億劫にわたる親族を解き放ち。疾くに罪簿を除き、悪根を落滅し。拘留して鬼群につながることをないように。ひとえに告げ命じるように、風火のように順次伝えるように」となっているが(3a-b)、この部分の原文「普告三界・無極神郷・泉曲之府・北都羅酆・三官九署・十二河源、上解亡過(某乙)等祖考、億劫種親。疾除罪簿、落滅惡根。不得拘留、通合鬼羣」は、「亡過(某乙)等」の部分を除き、やはり「度人經四注」巻2の本文に対応している(巻2・29b-37b)。「勅制地祇」の後半の文章は、「右地祇に勅して亡くなった誰それらを侍衛し送迎して、地戸、五苦八難から抜き出だし、七祖は升遷し、永く鬼官を離れ。魂は朱陵で鍊(度)を受けて更生するように。これは無量であり、普く救済されることは無窮であるように。ひとえに告げ命じるように、風火のように順次伝えるように」であるが(巻45・3b-4a)、原文の「勅制地祇、侍衛送迎亡過(某乙)等、拔出地戸、五苦八難、七祖升遷、永離鬼官。魂度朱陵、

受鍊更生。是謂無量、普度無窮」は、「度人經四注」巻3中の本文に対応する(巻3・41b-42a)。同様に「元始符命」の後半は、「右元始符命は、時宜に合わせて升遷させる。北都寒池では、誰それ等の亡魂を部衛し、制魔を制して保挙し、南宮で鍊度を受けさせる。死魂は鍊度を受けて、仙化して人と成る。生身は鍊度を受けて、劫劫に長く存在する。劫に随って転輪し、天と年を齊しくする。永く三塗・五苦・八難を超え、三界を超凌して、上清に逍遙する。ひとえに告げ命じるように、風火のように順次伝えるように」であるが(巻45・4a-5a)、原文の「元始符命、時刻升遷、北都寒池、部衛亡過(某乙)等形魂、制魔保舉、度品南宮。死魂受鍊、仙化成人。生身受度、劫劫長存。随劫輪轉、與天齊年。永度三塗、五苦八難。超凌三界、逍遙上清」は、「度人經四注」巻2の本文に対応する(巻2・38a-41a)。

そして高功は「願わくは慈悲を賜い、同じく降って鑑別し、元始の符命を齎し、北都の罪魂を赦してくれるように。誰それの亡魂を時宜に合わせて昇遷させ、みな日を計って度を受けさせ。地獄を経ずに、身に光明が有るように。劫刃の台に逍遙とし、永く福堂の界に処するように」と告げ、順番に保挙状を読み上げて、終わってから紙銭とともに焼く(巻28・8a-b)。

9.4.5 功德牒

この後高功は、飛天神王・飛天使者吏兵に対して、齋主の誠を尽した祈りに鑑みて、「誰それの亡魂を、鍊度して仙人となし、劫にわたり長く存在させ、福慶は子孫・一族たちに及ぶように。一切の有情は、同じように道岸に登れるように」請う。さらに「無量度人天尊」の号を唱え、亡魂が救済を受けるのに、その根拠がないのを考慮し「今亡霊のために、衆聖に告盟する。牒文を出給し、善く自ら齎し持して、用いて身宝となすように」として、功德牒を宣する(8b-9a)。

功德牒は巻13に見えるが、そこでは「功德壇牒」となっており、正薦の亡魂のための(一)と孤魂のための(二)とがある。ここでは以下に(一)を紹介する。

功德壇牒一

無上黄籙大齋壇 牒 亡過某官靈魂

本壇は先に某郷貫、(ここに「福祐見存」のところまで青詞が入る。)本壇は詞に抛り抑え難く、謹んで下元黄籙簡文、靈仙品格に依り、靈壇を建立し。今月某日を始として、無上黄籙大齋三晝夜を崇修した。九時に行道し、謹んで次第に依って真科を宣演し、宝章を拝奏した。符命を頒宣して、罪魂を遷抜した。地獄を開き赦し、燈を点して明るさを続け、光を請うて破獄を行い、普く九泉六道のために、無礙の夜齋を修設した

(普渡のことを指す)。召霊儀を宣し、沐浴・鍊度を行い。符を伝え戒を受け、超生を保挙した。事は終り、表を拝して功を言上し、龍を投げ筒を進め、ただ醜三百六十分位を設けた。仰いで洪恩に謝し、集めた善功は、総て超度に資した。今来功德は円満なので、まさに給付を行い、以って遷昇のための根拠とすべきである(巻13・24b-27a)。

として以下に実際に読んだ經典や唱えた神々の名前などが列挙される。ここには經典名や神々の名前は「逐一列挙する」とありながら、具体的には挙げられていない。他の疏文(開經疏など)によれば、經典としては『靈寶度人經』、『九天生神章經』、『九幽拔罪妙經』等が、神名としては「玉皇大帝」、「救苦天尊」、「九幽拔罪天尊」等が挙げられている。その他に、告下されたものとして、「救苦真符」、「長生靈符」、「生天寶籙」等が、給付されたものとして、「九真妙戒牒」、「九天宝誥」、「度命黃籙」等、先に授けられたものが列挙されている。さらに焼いて送ったものとして、(某)經若干卷(これも逐一列挙することになっている)、(某)幡若干首(やはり逐一列挙)、生仙淨衣一揃い、冥財(すなわち紙銭)若干等、建てたものとして様々な幡、そして呪食や普渡を設けたことが記されている(巻13・15a-16b)。

そして高功は「まさに願わくは亡霊は、牒を執って根拠とし、地司は永く罪録を消し、陰府は更に拘留せず、天上と人間とは、果に随って超化するように」と述べ、「北帝頌」を唱える(巻28・9b)。「北帝頌」は巻36に見え、「無上道に稽首し、元始(天)尊に帰心する。至真妙応の主は、飛玄の門を開化した。妙戒は五霊を怡ばせ、金書は万神に知らせる。命を察して籙籍を定め、靈符は苦魂を救済する。雲に乗って玉帝に朝し、ともに玄中の人と契る」という内容をもっている(巻36・9a)。

9.5 三塗五苦

さらに三塗五苦を越えさせる。三塗五苦の名前は『靈寶度人經』にすでに現れており、巖東の注によれば三塗(注では三徒となっている)とは三つの悪門の名であり、一は色欲門で上戸道あるいは天徒界という。二は愛欲門で中戸道あるいは人徒界といい、三は貪欲門で下戸道あるいは地徒界という。これらは常に人身中において三関の口を塞ぎ、三命の根を断ち、学仙成道の邪魔をする。五苦は一名を五道門ともいい、一は色累苦心門で太山地獄道ともいう。二は愛累苦神門で別名を風刀苦道、三は食累苦形門で別名が提石負山苦道、四は華競苦精門で別名が填海作河苦道、五は身累苦魂門で別名が呑火食炭鑊湯苦道という(巻2・40a-b)。五苦も三塗と同様に人身

中において、修仙の道を妨げるとされていたが、『太上洞玄靈寶往生救苦妙經』などでは、三塗は地獄、畜生、餓鬼であり、五苦は抱銅柱、履刀山、循劍樹、入鑊湯、呑火食炭と定義され、罪魂の陥る悪趣・地獄であると考えられるようになる²⁴(5a)。「立成儀」で高功の唱える文には、「落滅地獄惡道靈官、落滅下鬼惡道靈官、落滅畜生惡道靈官、飛度色累戸靈官、飛度愛累戸靈官、飛度貪累戸靈官、飛度情累戸靈官、飛度欲累戸靈官」とあり(巻28・10a)、巻45に載せる五苦誥文にはそれぞれ「滅度泰山地獄苦」、「滅度撻山負石苦」、「滅度提石負山苦」、「滅度填作江河苦」、「滅度呑火食炭苦」とあるから、悪趣・地獄の意味であると捉えられている(巻45・14b-16b)。巻24「五苦迴耀輪燈儀」は五苦からの救済の儀礼であるが、実際は三塗五苦からの解放を目的としており、「三業が除かれなければ、どうして三塗の取り調べを離れることができよう。五蘊が滅していなければ、五苦の輪を停めることは難しい」と述べられている(巻24・19b)。なお巻1「建齋総式第二」によれば、この儀礼は第一日目の夜、九幽神燈儀に続いて行われることになっている(巻1・11b)。この三塗五苦に関わる儀礼は普渡には見えない。

先に触れた「三塗五苦」の告文を宣し、紙銭と符を幡の下で焼いた後、「悪根は断絶して、五道に漂い沈むのを免れ、苦累は除き消されて、六塵を超えて清浄になる。魔王は監挙して、天門に拘ることなく、再び仙童を請いて、同じく引導を加える」と唱える(巻28・10b)。この「魔王は監挙して、天門に拘ることなく」の部分は、やはり「度人經四注」巻2の本文からの引用で、「請滅三惡、斬絶地根。飛度五戸、名列太玄(三惡すなわち三塗を滅して、地獄の根を絶ち、五戸すなわち五苦の門を超えて、太玄の仙人の籍に名を列する)」に続く部分である(巻2・59b)。

9.6 五方童子の招請

次に「仙童を請う」儀礼を行い、五方の童子を招き、亡魂を神仙界に導く。始めに東方に向かい「東方青靈啓道童子を奉じ請う、手に青の蓮花を執り、この亡霊を接引するように」と唱え、道士たちは「往生神仙界」と唱える。続いて南方・中央・西方・北方の童子を順に招き、手に執る花の色も、紅・黄・白・碧(五行の対応では本来黒)と変わっていく。そして「五霊童子に導かれて、天界に気ままに遊び、仙人たちの館に寛ぐ。元始天尊に朝謁し、輪廻に墮ちることなく、長く奥深い真理に遵う。天恩に感謝し、大道に帰依する」と唱え、逍遙快樂天尊の号を唱える(巻28・10b-11a)。その後、亡魂を

率いて大道(内壇の中心に三宝を設したうちの道の部分)の前に至り、法師は亡魂と一緒に謝恩させ「亡魂は建齋の功により、経を聴き、罪を許され、鍊度を受けて新しい身体を受け、符や戒を伝授され、更生することができた。そのため天地の大徳は、だれかその極りなき恩に報いることができよう；螻蟻のように微かな誠は、まさに謝生の所を識るべきである。亡霊(某)等は、仰いで天恩に感謝し、稽首再拜する」と唱える(11b)。

9.7 儀礼における過誤の謝罪

道士たちは霊書を唱えながら、亡魂を引率して焚療所に至る。高功は(おそらく高功は壇に残っているであろう)回向し、齋儀を執り行う上で、誤りがあると神々に罰を受けるので、そのことについて予め神々の許しを受けるために、「科典に不明で、威儀を犯していたことがあり、三官に調べ正され、九府に過ちを書かれるのを懼れている。あえて天恩・天祐を希い、俯して赦しを賜らんことを願う。神々の乗り物は仙界・天の役所に帰った。四方は平安で、大道は盛んになり、一切の存在は好い結果を得る。私は謝罪して恩が至るのを請う」と唱える。

9.8 「防送関」の発行

そして法師は三礼して出で、焚療所に至って行持し、金龍馱吏を召し、関子を読み、長生符を発する。ここには記されていないが、ここでいう関子(文書の形式の一種)は「防送関」と思われる(11b-12a)。

「防送関」は巻13に載せられているが、無上黄籙齋壇より、本司法院の神将・丁甲吏兵などに対して発せられるもので、「本壇はどこの誰そのために、無上黄籙大齋を行い、普く六道・四生、孤魂滞魄のために、普度の宴を設けた。そして真実の科儀に従って、鍊度を行った。今事が終わり、すでに牒状を給してそれに照らして生を受けたほか、将吏を派遣して送らせる、(将吏)至って指揮を行うように」という内容をもっている(巻13・29a)。そして神将・吏兵らに対しては、「救済を受けた亡魂たちを管理し送って、黄籙院に行き、直日曹吏に引き渡し彼らと計り、黄籙の決まりや元始符命に遵って、救済の手続きを行い、特に罪籍から名前を削り、功德に随って救済し、人・天世界に生まれ変わらせるように」と告げている(巻13・29a-b)。

9.9 亡魂に法橋を渡らせる

法橋大度天尊の号を唱え、亡魂を接引して橋を渡らせる。すなわち橋を渡って天界に上昇するのであり、升

度法橋呪を宣する。呪文は、天門に至る法橋を架け、威儀を整えた亡魂が橋を渡り、空を登っていくことを表現している。このようにして亡魂を送り、三清樂を奏し、伝授した符・簡、使用した経・幡そして紙銭などを焼く(巻28・12a-b)。道士たちは焚簡頌を唱える。内容は、「亡魂たちは符籙を受け、伝授を受けて、昇仙することができた。名前は籙に記されて、玉帝の前に逍遙することができる」というものである(巻36・9a-b)。そして高功は「魂神は澄んで正しく、万炁は長く存在する。苦悩を経ることなく、身には光明が有る。功德は満ちて成就し、上清に逍遙する」という呪文を、声を揚げずに唱える。この呪文は名前が記されておらず、「超度法を行う」とのみ記されている(巻28・12b)。そして「化生呪」、「化牒呪」をやはり声を揚げずに唱え、「火鈴は地に満ち、炬赫たることは太陽のようで、天地にわたり徹する。度を受けた靈魂は、金光に乗って昇天し去る」と存思する(12b-13a)。

9.10 普渡の功德の回向

次に普度薦魂呪を唱える。これは普渡の功德を正薦の亡魂そして齋儀の主催者に功德を回向する目的を持っている。そして「宝華円満天尊」の号を唱え、神々を讃え、功德が円満に成就したことへの感謝をささげる。これも儀式の最後によく見られる。「上のように行ってきた開度の、無量の功德は、すべて已にあまねく完成した。淨衆たちにより、上因縁となった。大聖元始天尊、太上大道君、太上老君、太一救苦天尊、十方救苦天尊、九幽拔罪天尊、朱陵度命天尊、法橋大度天尊、火鍊丹界天尊、金闕化身天尊、転輪聖王天尊、隨願往生天尊、逍遙快樂天尊、大慈大悲救苦真人、大慈大悲大慧真人、大慈大悲拔罪真人、大慈大悲拔度真人の不可思議な功德を念ずる」。「奉じて齋官のために、功德は完全に成就した。福を集め災いを消す。紫清降福天尊、消災解厄天尊、延寿益算天尊、福生無量天尊、八卦護身天尊、九宮捍厄天尊、宝華円満天尊の不可思議な功德を念ずる」(13a-14a)。

以上のようにして正薦の「伝符・授戒」は終了するが、ここで全体の流れをまとめておきたい。まず9.1で神々の来臨を請い、功德の証盟を依頼する。次に9.2で亡魂に道宝・経宝・師宝の三宝に帰依させ、9.3では九真妙戒を伝授する。そして9.4では昇仙のために必要な様々な文書を授ける。始めに「長生符」を、次に「九天宝誥」・「長生度命金籙」、「昇天券」を、そして「歴闕諸天」、「普告三界」、「勅制地祇」、「元始符命」からなる「保拳状」、さらに今回儀礼を挙行したことの功德を証明する「功德

牒」を授ける。9.5では仙道の修行を妨げる業でもあり、そのために墮ちる地獄でもある三途五苦を越える儀礼を行う。9.6では亡魂を仙界に導く五方童子が招請され、9.7で儀礼の執行中に道士たちが犯した過誤を神々に謝する。そして9.8で亡魂を仙界へ導くにあって必要な「防送関」を発行し、9.9で亡魂に法橋を渡らせて仙界へと導く。最後に9.10で普渡の功德を、この正薦の儀礼で救済する亡魂および儀礼の主催者たちに回向する。

この「伝符・授戒」については、普渡ではその記述が9葉7行を要したのに対し、正薦の場合は14葉9行と1.5倍ほど多くなっている。そしてその相違点の多くは発行される文書や行政的手続きの多さと、説教がここで行われていることによっていることは見てきた通りである。

おわりに

以上ここでは「立成儀」に記された普渡と正薦の儀礼について、その内容と相違点について考察してきた。まず両者の記述量からいえば、「召霊」や「沐浴」については、両者ともほぼ変わらない。「疾病の治療」と「施食」については普渡のほうが多く、特に「施食」は3倍近く普渡のほうが多い。しかし「鍊度」や「伝符・授戒」に関しては、正薦のほうが多くそれぞれ約1.4倍、1.5倍ほどになっている。

「疾病の治療」においては、2章でも述べたように、道教というより中国の民間信仰において、身体が完全でなければ救済されないという考え方が根強く存在するため、この儀礼が必要とされたと考えられる。普渡には、「大洞十八玉符」を用いて、一つ一つ欠けたところを回復していく儀礼が存在しているのも、特に普渡の対象となる孤魂・厲鬼には、事故や戦乱あるいは処刑によって亡くなったりするなど、この儀礼が必要であることが大きいのであろう。「施食」では、呪文を唱えるに際して宣告する文章も、普渡のほうが明瞭にその意図を示すものが提示されている。「施食」は普渡の儀礼において、現在でも核をなす部分となっており、孤魂・厲鬼に腹いっぱい食べてもらうのが普渡の目的と考えられている。この考え方は、この普渡の基になった仏教の施餓鬼の儀礼でも、餓鬼に食を施すのが眼目となっているから、この点は変わっていない。ただ「立成儀」の内容にそっていえば、甘露の食を食べることによって欲望から解放され、その上で教えに帰依する、あるいは教えを理解して仙人への道をたどる、というように位置づけられている。また「説教」にも道教の特色が現れていること

は見てきたとおりである。特に正薦の儀礼においては、仏の慈悲による救済というより、自ら道教の教義（これには輪廻など仏教の教義もかなり取り入れられてはいるが）を理解し、仙人への道をたどるということが、強く主張されている。またその位置づけにおいても、普渡では施食のあとに置かれており、正薦では「鍊度」の後、「伝符・授戒」の前に置かれているが、この位置づけからも、普渡では「施食」が重視され、正薦については「鍊度」が重視されていたことを示していると考えられる。そして「鍊度」など道教的な色彩の強い儀礼や、「伝符・授戒」等の昇仙のための行政的手続きを行う儀礼では、普渡に比べて正薦のスペースのほうが多い。以上のような事実は、道教が仏教の施餓鬼儀礼を参考に普渡儀礼を形成した後、ここに鍊度などの道教的な色彩を持った儀礼や、救済の行政的手続きやその手続きのための文書を発行する儀礼を追加して、特に救済の主たる対象、すなわち祖先に関わる儀礼においてこれらの儀礼を充実させていき、さらに普渡にもこれを及ぼしたという過程を反映しているのではないかと考えられる。

しかし以上に紹介した儀礼は、黄籙齋を構成する儀礼の一部にすぎない。黄籙齋の全体の構成については、「立成儀」巻1「建齋総式」などに詳しく記述されている。はじめに道士は依頼を受けると、神々に齋を挙行することを奏上する。そして日を選んで儀式を行う壇を建てる。齋の32日前になると、神々に預告を行い、10日前になると関係する神々すべてに、奏状・申状・牒状等の文書が発行される。齋の前日には、壇を結界して五方真文を安置し、道士に儀礼上の役割を割り当てる等を行う宿啓が行われ、夜には正薦の亡魂に対して、召霊、沐浴、呪食等一連の儀礼が行われる。「立成儀」で正齋の期間とされるのは3日間で、この間には一日三回の行道（道士が毎日行う勤行を基本とする儀礼で、諸天の神々が一日三回元始天尊に朝謁に行くのに倣ったものという。それぞれ早朝、午朝、晩朝という）、三回の転経（経典の読誦）が行われ、夜には一日目は破獄、二日目は前論で述べた普渡、三日目は正薦の亡魂の鍊度と昇度が行われる。そして次の日に、齋において行道や誦経によって積んだ齋主の功德を報告し、亡魂に回向して救済の糧とするための言功拝表、協力してくれた神々を饗応し、齋功の成就を感謝する散壇設醮等が行われる。

杜光庭の『太上黄籙齋儀』などに見える黄籙齋では、行道と転経すなわち経典の読誦を主とした齋の施行によって積んだ功德を使者に回向して、死者の冥福を祈ることが齋の考え方の基本であった。9章で紹介した「功德牒」はこの考え方を示している。9章でも述べたよう

に普渡を行うことはこの功德の一つに挙げられている。すなわち葬送儀礼として行われる黄籙齋において、普渡を行うことは、黄籙齋の主要な救済の対象である死者(両親や祖先)の功德とするということが主眼になっている。もともと道教の黄籙齋では、行道儀や転経儀などで功德を積み、これを亡魂に回向して救済の糧とすることが基本で、この考え方は仏教儀礼に由来するのであろう。もちろん前論で考察したように、始めから普渡を目的として黄籙齋を行う例も、『夷堅志』に収められた話や、文集に残された黄籙齋のための青詞などにしばしば見られる。それは特に災害や戦乱の後など、孤魂・厲鬼が多く生まれた際に、その祟りを避ける目的で行われることも多かったと考えられる。

後の道教の普渡や葬儀では、本稿で考察したような一連の儀礼が主流になり、早朝、午朝、晩朝の行道は一回しか行われなくなる。その早い時期の代表例が『大明玄教立成齋醮儀』に見える。ここで見た「立成儀」など宋代の儀礼書において、『太上黄籙齋儀』に見える行道や転経を主とした齋儀と、ここで考察したような一連の儀礼の両者が併存しているのは、過渡期の特徴を示しているといえるかもしれない。

ここでは宋代に現れた規模の大きいいくつかの儀礼書から、比較的早期に出現し、また儀礼の内容の記述が明確な「立成儀」を取り上げて、普渡と正薦の儀礼の比較を通じて、仏教の普渡(施餓鬼)儀礼との関係を考察してきたが、宋代には他にも多くの儀礼書が成立している。今後はこれらについても考察を進めていきたい。次にはやはり儀礼内容の記述が比較的明確で、著者の儀礼に対する意見と当時の傾向に対する批判が記述された、金允中『上清靈寶大法』を取り上げ、「立成儀」と比較しながら、正薦と普渡の儀礼の過程を考察し、ここでは充分には行えなかった、これらの儀礼の黄籙齋全体の中での位置づけについて考察してみることにしたい。

附記

本論文は、科学研究費補助金(25370043)「道教の普渡儀礼の成立と現状」の助成を受けた成果の一部である。

註

¹ Kristofer Schipper and Franciscus Verellen ed. The Taoist Cannon. Vol.2, The University of Chicago Press, 2004, p.1014-8.

² 大淵忍爾。“功德の儀礼”。中国人の宗教儀礼。福武

書店、1983, p.463-677.

³ John Lagerwey. Taoist ritual in Chinese society and history. Macmillan Publishing Company, 1987, p.169-237.

⁴ 浅野春二。台湾における道教儀礼の研究。笠間書院、2005, 554p.

⁵ 丸山宏。道教儀礼文書の歴史的研究。汲古書院、2004, 659p.

⁶ 李豊林・謝聰輝。“臺灣的齋儀”。臺灣齋醮。傳統藝術中心籌備處、2001, p.98-103.

⁷ 洪瑩發・林長正。“拔度濟幽”。臺南傳統道壇研究。臺南市政府文化局、2013, p.122-143.

⁸ 山田明広・洪瑩發。台湾の道教儀礼に見られる口頭語によるパフォーマンス。アジア文化交流研究、第三号、2008, p.281-299.

⁹ 彭理福。“陰事道場”。道教科范。宗教文化出版社、2011, p.394-641.

¹⁰ 任宗権。“陰事道場”。道教科儀概覽。宗教文化出版社、2006, p.12-313.

¹¹ 胡天成主編。“道教喪儀的基本結構和主要内容”。民間祭礼与儀式戲劇。貴州民族出版社、1999, p.510-697.

¹² アンリ・マスペロ著、川勝義雄訳。道教。東海大学出版会、1966, p.44-50.

¹³ 山田利明。“道教における齋法の成立”および“靈寶齋の思想的基盤”。六朝道教儀禮の研究。東方書店、1999, p.173-228。小林正美。靈寶齋法の成立と展開。道教の齋法儀礼の思想史的研究。知泉書館、2006, p.65-95.

¹⁴ 呂鵬志。“東晉末劉宋初融攝天師道、佛教和方士傳統的靈寶科儀”。唐前道教儀式史綱。中華書局、2008, p.99-121.

¹⁵ 松本浩一。宋代の道教と民間信仰。汲古書院、2006, p.139-192.

¹⁶ 浅野春二。洞視法と神虎法：南宋期の靈寶齋の儀式緒に見える修行法と招魂法について。東方宗教、116号、2010, p.47-72。浅野春二。神虎法による召魂儀禮について：審全眞授、王契眞纂『上清靈寶大法』を資料として。國學院中國學會報、第五十二輯、2006, p.64-74。等がある。

¹⁷ 松本浩一。“道教と地獄”。聖地と他界観。名著出版、1987, p.416-417.。(仏教民俗学大系、第3巻)

¹⁸ この論文では「立成儀」からの引用は、台湾の藝文印書館影印の『正統道藏』に基づき、巻数と葉数を表示し、巻数が明らかな場合は葉数のみ示すことにする。

¹⁹ この「混元玉札」については、浅野春二氏によれば、その内容は「内諱・隠諱等と稱する神々の秘密の名」であるという（浅野氏前掲「洞視法と神虎法：南宋期の靈寶齋の儀式書に見える修行法と召魂法について」, p.48-51）。

²⁰ 大淵氏前掲書 p.538.

²¹ 「立成儀」巻25に記載された「神虎告玉札儀」は、巻1「建齋総式第二」によれば、正齋前一日の夜に宿啓儀に先立って行われることになっているが、この儀礼では、神虎関係の神々・神将たちへの三献の後、「混元玉札」を發し、神虎二大聖・三部追魂使者に依頼して酆都などの地獄に赴き、道を開いて、亡魂を

召請して壇へ招く。ここで召請の対象となるのは正薦の亡魂で、その傍ら孤魂に及ぶという形になっている。

²² 前掲『宋代の道教と民間信仰』, p.166.

²³ 儀文には救苦符の記述がないが、救苦符の告文（巻44・1a-b）を見ると、正薦の亡魂にも發せられていることがわかる。

²⁴ 前掲. “道教と地獄”. p.419-421.

（平成27年3月10日受付）

（平成27年7月21日採録）